

山本一清博士とカルヴァー46センチ望遠鏡

モンゴル国・フレルトゴート天文台評議員
(長野県) 坂井義人

1 山本一清博士の略歴



若き日の山本博士



京大花山天文台の山本博士

- 1889年5月27日 滋賀県栗田郡上田上桐生 289 番地にて出生
1907年3月 滋賀県立膳所中学校卒業 同9月第三高等学校第二部
工科入学
1908年6月23日 京都市平安教会にて西尾幸太郎牧師より受洗、19歳
1910年7月 第三高等学校卒業、9月京都帝国大学理工科大学物理
学科入学(学生としてハレー彗星観測に関心)
1913年7月13日 京都帝国大学卒業、同大学院入学、同12月14日結婚
1914年1月 緯度観測所臨時嘱託 同5月水沢赴任(1916年京大に
戻る)
1914年4月24日 京都帝大理工科大学助手、翌年講師、
1916年より1922年まで、測地学委員会嘱託にて、約280点の重力測定
1918年6月9日 鳥島で日食観測 10月19日京都帝国大学助教授
1920年9月1日 古川龍城氏らと天文同好会(後の東亜天文学会)を設立
1921年6月23日 天文啓蒙書・星座の親しみ、第一版の発行ベストセラー
1922年9月11日 文部省在外研究員として米・英・独・仏各国に留学
1925年3月3日 帰国 同4月18日京都帝国大学教授
同7月20日 理学博士学位取得
1927年6月 中国奉天にて、ボン・ウィンネッケ彗星観測 同11月

- 10 日台湾にて水星太陽面通過を観測 同 12 月英国のグド・エーカー氏 (Mr Goodacre) より、カルヴァー46 セン反射望遠鏡赤道儀を譲り受ける
- 1928 年 12 月末 台湾にて、ヤマザキ・フォーボス彗星、画架座新星観測
- 1929 年 5 月 9 日 スマトラにて日食観測 同 6 月ジャワにて太平洋学術会議出席
- 1929 年 10 月 花山天文台設立
- 1933 年 6 月 カナダにて第五回太平洋学術会議参加、米国天文視察
- 1934 年 12 月 台北市にて日本学術会議第 10 回総会出席
- 1935 年 4 月 台中観測所地震災害調査 同 10 月中国各地等視察
- 1935 年 7 月 国際天文同盟黄道光委員会初代委員長推薦就任
- 1936 年 6 月 19 日 ソビエト連邦オムスクにて日食観測
- 1937 年 3 月 1 日 勲三等叙勲
- 1937 年 6 月 8 日 ペルーにて日食観測 同年 広島県福山市外に黄道光観所設置
- 1938 年 5 月 30 日 高等官一等・従四位 5 月 31 日依願退職
6 月 13 日 正四位 同 8 月ストックホルムにて国際天文連盟総会出席、第二期黄道光委員会委員長に就任
同 9 月 22 日スウェーデン国天文学史学会名誉会員
- 1939 年 3 月 満州国、中国華北地方を三ヶ月間遊歴
- 1940 年 10 月 私設・田上天文台建設に着手、11 月より観測開始
カルヴァー46 センチ反射望遠鏡赤道儀設置
(1942 年 5 月 25 日、天文台落成式举行)
- 1941 年 9 月 21 日 台湾北部の富貴角にて日食観測
- 1946 年 4 月 10 日 衆議院議員総選挙に社会党公認立候補、35 人中 10 位で落選
- 1947 年 4 月 5 日 滋賀県知事選挙に社会党公認立候補落選
- 1948 年 8 月 25 日 上田上村長選挙無投票当選、9 月 1 日就任、翌年 10 月 28 日辞任
- 1955 年 1 月 創立者の名に因み、山本天文台と改称
- 1956 年 頃 神道系宗教法人・三五教 (アナナイ教) よりの要請に基づき、天文活動指導に協力着手
- 1957 年 1 月 5 日 静岡県沼津市にアナナイ中央天文台 (通称・香貫山天文台) 建設を清水市教団本部にて発表、
(山本一清ご夫妻、宮本正太郎博士ほか学術関係者臨席)
- 1957 年 3 月 20 日 静岡県清水市にてアナナイ系天文暦算局開設挨拶状を天文関係者に送付 中央天文台(沼津市香貫山)建設着手
- 1957 年 9 月 21 日 沼津市・アナナイ中央天文台落成式 カルヴァー46 センチ反射望遠鏡赤道儀を山本天文台より貸与移設
- 1958 年 4 月 19 日 鹿児島県指宿市にて日食観測
- 1958 年 秋 山本ご夫妻、運用方針問題で滋賀県に帰郷
- 1959 年 1 月 16 日 滋賀県草津市大路井町 420 番地、午前 10 時 13 分病氣療養永眠、享年 70 歳

1959 年 1 月 18 日	日本キリスト教団草津教会にて、東亜天文学会告別式 (東亜天文学会誌・天界にて特集号発行)
1960年	カルヴァー46cm は、坂井義雄の斡旋により沼津市香貫山 アナナイ中央天文台より岐阜市「富田学園」に売却移設 約 30 年の後、不要となった折は坂井義雄にて譲り受ける 口頭約定に則り、坂井による私的所有移転
2011 年 6 月	山本遺品類全品と、坂井義雄所有のカルヴァー46cm 望遠 鏡その他を京都大学に寄付移管実施しすべての山本関連重 要遺品類の集約が完成

2 山本一清博士の主要活動とその意義

山本一清(ヤマモト・イッセイ) 博士は、大正時代より昭和の中ごろまでのわが国を代表する天文学者の一人である。名著「星座の親しみ」を世に送り、有形無形の天文学財産を残されていた篤志天文家でもある。

今般、先生ご逝去後 50 年以上を経て、ようやくその活動の結果と遺品類を京都大学宇宙物理学教室、花山天文台・京大図書館の連携その他によりすべてを集約化し、全貌の解明と意義付けの活動が開始された。本稿は 2012 年 3 月 9 日に開催された国立天文台主催「天文歴史研究」において発表した内容を紹介するものである。

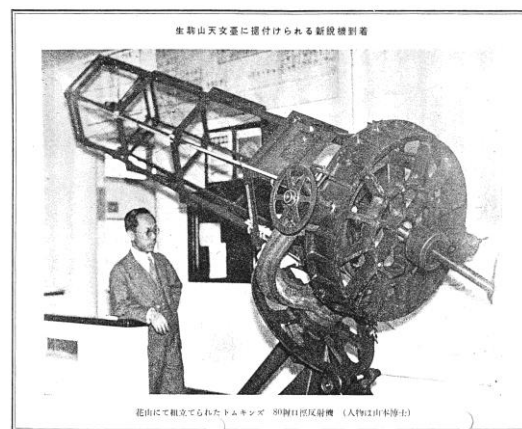
山本先生の生涯は、おおよそ四期の活動に分類されると考えられる。まさしく人生の起承転結の最たる好事例として、報告者はそれに対していつも畏敬を感じており、以下その俯瞰を試みたい。

第一期はご生誕から大学卒業までの学習期の時代である。これは誰の人生にもあるもので、通常理解で十分であると思われる。特筆事項としては、強いて言えば、若き日のキリスト教洗礼などであろう。ただしその経緯は、後に先生の人生を論ずるうえで、大きなエポックとして再浮上してくることとなる。また毎夜、ハリー彗星の観望に欣喜して興ずる姿も伝えられている。

次に第二期としての時代は、研究者としての専門性のある活動の時期であろう。しかしながら、既にこの時期より、名著「星座の親しみ」の出版、一般姿勢の市民を対象とした天文同好会の発足、そしてそれに続けて、公私を問わずの天文行脚と指導活動など、未だすべてが明確では無い数多くの足跡を残している。これらの諸活動に関しては、別の稿と第三者の検証紹介に待つ事を期すべきと、ここでは留めたい。山本先生の大きな数々の影が、今後も全国随所に見出されて来るはずである。



京大カルヴァー30cm 鏡

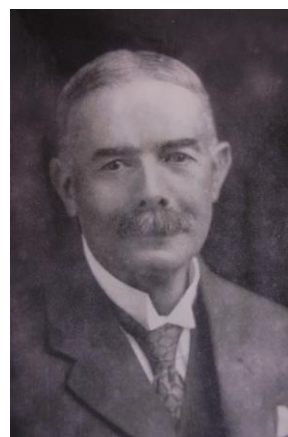
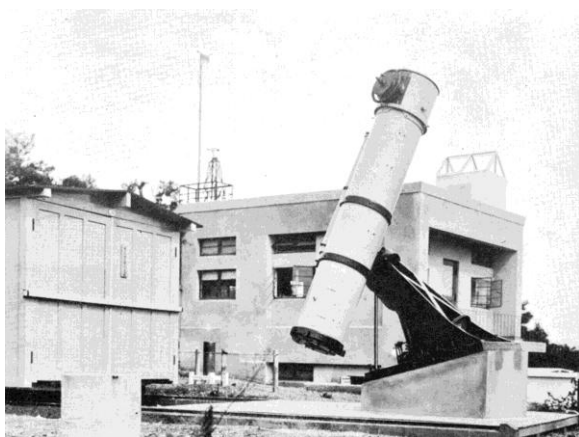


生駒山遊園地 60cm 望遠鏡

上記の写真は、京大時代に研究者として脂の乗り切った時代に輸入された望遠鏡である。左はカルヴァー30cm 反射で、合計二台輸入され、一台は京大にて活用、一台は岡山県の倉敷天文台にて活用された。京大のものは残されてはいないが、初期の人工衛星観測用のシュミットカメラ望遠鏡用の赤道儀として、昭和 40 年前後までは活用された。また倉敷のものは、現在も市指定文化財として保存されている由である。

右はトムキンズ 60cm 反射鏡といわれ、当時の新鋭機であり、現在の近畿鉄道の前身の営利企業にて生駒山の遊園地に設置され、ごく初期の公開天文の施設として市民に公開され活用された由である。この望遠鏡は京都大学とは全く無関係とは言うべきであるが、山本先生の肝入りで導入をされ、そうした市井への関与の好事例として記憶に留めるべきものであろう。

なお、以上の機材についての輸入経緯、設置年限等の詳細なる情報は、報告者はこれ以上の材料を持ち合わせてはいないのでお許しを願わしい。山本先生の社会との緒帯としての活動の好事例として、重要に考えるべき事柄であろう。過去の東亜天文学会雑誌「天界」をくまなく調べれば、判明するはずである。先生の人生の第二期というべき諸内容は、専門科学者としての位置づけであり、鏡面研磨者として著名な中村要の育成を始め、心躍らせるエピソードは枚挙に暇が無い。



カルヴァー46cm 反射望遠鏡赤道儀は、山本先生活動の全期間の中であって、特に留意すべき機材である。先生の学際時代というべき第二期、そして大学退官後の第三期以降とそれに続く、僅か数年に亘る第四期、また先生逝去後の五十年を経て今に蘇る、数奇な宿命を背負った望遠鏡でもある。

この機材は、山本先生の英国遊学時に、イギリス天文協会(B・A・A)の会長を務めた「ウォルター・グドエーカー」より 1927 年に譲り受けたもので、同機はスケッチ観測による精密月面地図製作に活躍した名機であったという。製作はイギリスの「ジョージ・カルヴァー」(G. Calver 1835~1927)といわれ、前出の京大助手「中村要」は、カルヴァーを師と仰ぎ、書簡を重ねて反射鏡製作技術を習得していったと伝えられる。

先生のご子息の山本進氏の述懐（天界誌・山本一清追悼号）によれば、こうしたイギリスからの望遠鏡輸入に際して「中古買の山本」と揶揄酷評もされたという。しかし、いまだ大型望遠鏡の製作技術の未熟なる時代にあって、これは意義深い行動であったものと解釈すべきであろう。

しかしながらこの機材の購入に際しては、その会計処理が不明瞭と問題視され、結果、当時の大学会計担当責任者の引責離職、また先生ご自身も50歳を一期として、1938年大学教授の職責を追われることとなる。このあたりの顛末については、日本天文学会・天文月報誌にも紹介されたことがあり、ご承知の方も多いのではと思われる。

また、ご自身と同志によって結成された「東亜天文学会」(O・A・A)の行く末も、京大宇宙物理学教室から姿を消し、第三期の私的天文学活動、すなわち田上天文台(山本天文台)に継承されて行く。この後の山本先生とご一統様のご労苦を、深く敬意を表し今は偲びたい。



天文台研究室の山本先生（背景は中国古代の星図など貴重な資料類）



カルヴァー望遠鏡設置の第二観測室
（地下に分光、干渉観測も意図）



エリソン 15cm 鏡と山本先生

上記の写真は、山本先生の大学退官後に展開した第三の時代を物語代表的なものである。いわゆる私設「田上天文台」の活動の時期であり、カルヴァー46cm 望遠鏡輸入の後、約 13 年後以降のことである。

さて、上記にも紹介はしたが、東亜天文学会について多少論ずることとしたい。山本先生とその天文学上の盟友によって、京都大学奉職時代に結成された、わが国最古の天文同好会と位置づけされる。これは英国流の官営天文学会すなわち王立天文学会に対して、民の意義付けと思想とによるプロアマチュアを問わず組織されたイギリス天文学会を模範として設立されたといい、京都大学研究室を事務所管としたにかかわらず、多くの素人天文愛好家(あえて、アマチュア—天文学者と規定)をそのメンバーとして分け隔てなく吸収していった事に現れている。当然東の東京大学と日本天文学会を意識したものであり、今も語られる京都大学の自由なる学風にも極めてマッチングしたものであったと言って良いであろう。

しかし、山本先生の退官後に、それらを大学で引き継ぐ経緯には至らず、こうした試みは生駒山太陽観測所の同好会組織も含めて、自然消滅の憂き目を見たのであろう。このあたりはもう一度当然検証を図るべきであり、今は私的な見解に留めておきたい。いずれにせよ、山本先生にとっては、アマチュア—天文学の父を自他共に認めて活動の途を切り開くより方法は無く、東亜天文学会は山本学会の様相を呈して、ご自身の私的な新規の天体観測所「田上天文台」(当初は、上田上天文台とも呼称したと聞く)に引き継がれていった。完全に都落ちの平家の公達的なお姿ではあるが、当時 46 センチの口径を誇ったカルヴァー反射望遠鏡は、山本私的財産として個人天文台の象徴とされ、東洋一の望遠鏡としても誉めそやされた。合衆国の火星観測をリードした「ローウェル天文台」とも比肩されるべき、心楽しきかつ『民』の天文学をより意識させる事象であったと考えたい。

山本先生の活動は、科学ジャーナリストとか、天文解説者とか、それらとは全く異なった在野の天文学を展開していったが、平成の現代、残念ながらそれらを正当に継承する天文学施設は、ほとんど見当たらない。今になって悔やむべきことでもないであろうが、しかしながらそれらの意義付けと、記憶には留められるべき大切な昭和の時代の証言と位置づけられるべきであろう。特に、機関紙の「天界」の記事編集と、今では雑誌社の手がける天文暦など、物資の少ない時代を通して、いわゆるガリ版刷りなどでもその多くを提供された。各地への講演活動と現地指導、息のつく間もない(引くに引けない)期間であったろう。一言で言えば、成人に達していない会の行く末を案じての事だったに相違ない。



岐阜市金華山天文台紹介



坂井義雄（1924～2002）

山本先生の特異な活動事例のいくつかには、地方の天文観測施設の設置等の指導なども見逃すことが出来ない。多くを語る資格はないが、一例として亡父・坂井義雄（坂井誉志男）の事例を紹介させていただきたい。なお、これ以外にも、各地には先生指導による未だ知られざる観測普及施設も存在したと思われる。

坂井義雄は、青年期に山本先生の天文台に志願助手としてお世話に預かり、後年その教えを元に、織田信長の居城として著名な、岐阜市金華山頂に「岐阜天文台」を 1951 年に設置した。ただし旧陸軍の気象観測所建物をそのまま借用し、岐阜の天文同好人士とともに当初は運用された模様である。しかし、一家五人での天文台山頂生活者として、果たして世間からはいかなる認知を受けての門出であったのか、その評価は今以て困難でもある。補助金も受けてのことではあったと言うが、凡そ 8 年程度で市長交代劇という岐阜市当局との政争の具とされ、敢え無く廃台の憂き目となり終焉に向かった。また、以下に紹介する宗教団体「三五教」（三五と書いてアナナイと発音）の天文活動に協力する山本先生の応援にも駆り出され、その僅か二年後程度に劇的な恩師との死別という悲運も同時に重なり、若輩の身には前途を計り知る術は持ち合わせなかっただろうと推量される。一挙に自然の猛威に晒されて、打ちのめされたような感慨でもあったろう。その後は、光学機器類製造販売などを手がけて、再び五十歳台以降、飛騨の地に私設の「斐太彦天文処」及び天文ブームによる自治体天文施設の設置協力を経て、人生の終焉を迎えた。山本先生の足跡を辿りつつ・・・小惑星 8735 Yoshio Sakai と命名。

3 晩年(第四期)の山本一清博士について



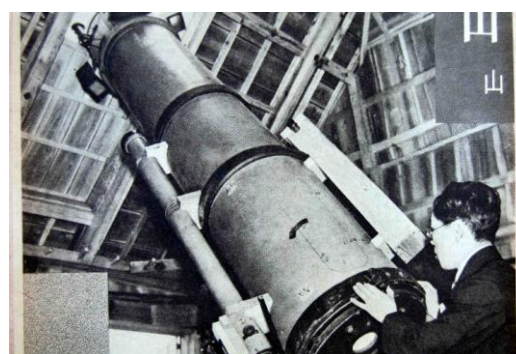
三五教・中野与之助開祖と共に(右端)



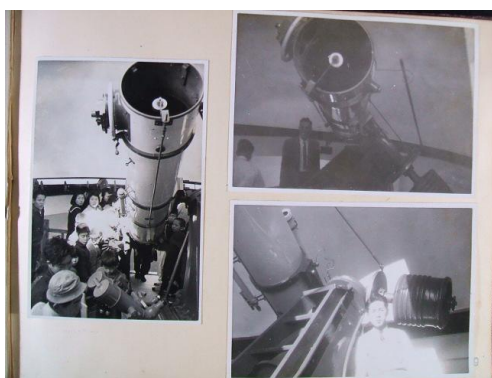
沼津市香貫山・アナナイ中央天文台



山本博士ご夫妻 岩下・元子爵



移設前の山本天文台 46cm 鏡



アナナイ中央天文台移設後 46cm 鏡



移設後 46cm 鏡

山本先生の下に三五教団から天文指導の要請がなされたのは、1956年のことである。「天文と宗教は一如なり」との教団側の宣言に応じたものと言われ、大本教から派生した神道系の宗教団体への協力の始まりであった。「山本だからこそ協力するのであって、他の誰もそう事はしないだろう」と、語られた末での英断だったという。その関係は沼津市香貫山・アナナイ中央天文台へのカルヴァー望遠鏡設置に始まる。



山本夫妻・渡辺博士・坂井



三五教団祭事の山本博士



三五教信徒天文講演



三五教団祭事・沼津市

中央天文台開設当時、一説によると資金の調達の困難さ、また特徴ある観測機材の導入など問題は山積して、計画当初の 25 センチクラスの屈折望遠鏡の設置の計画を、当面「山本天文台のカルヴァー望遠鏡」を以ってそれに当てるという山本先生のご厚志から変更されたと聞く。これが正しい判断であったかどうかは、おのずと結論は見出されるが、この判断を期に、望遠鏡は山本天文台には永久に戻る事はなかった。上記の写真は、1957 年(昭和 32 年秋)に開催された教団の一連の「天文祭り」の時の模様を伝えるものである。特に、衣冠束帯に身を包み、得意満面の山本先生のお姿に注目をいただきたい。キリスト教徒としての先生の

奇行とも捉えられかねないものとも言えるが、先生は自ら進んで馬上の人となられたという。

教団の全国の各支部には、独自判断で天文台設置計画も進められており、これらは必ずしも山本先生の指導性とは相容れるものではなかったとも伝えられる。沼津市の中央天文台の陣容も未だ学問的には不十分であり、神社の末社に分霊もせずして、神殿の社殿が作られるのは不合理との比喻にも当たらないであろうか。いずれにしても、沼津市の中央天文台を中心に、濃尾、信州、四国の眉山、九州をはじめとして、十箇所に及ぶ全国各支部に、その地の地名を冠したアナナイ系の天文台が作られていったのは事実である。これらは、現在も風聞程度ではあるが、記憶に留められ続けた、ある意味悲しい出来事でもあったであろう。事実、その後の各地の天文施設の辿った道は、地元自治体との係争などにも繋がり、順次整理の運命を辿っていった。しかしながら、宇宙への関心も喚起されつつあった当事、結構立派な観測望遠鏡も整えられ、今にして思えば、存続をされたら意義もあったのではないかと、残念にも思う。

1958年(昭和33年)秋、山本先生と教団側との立場の差異は、九州の道場に天文台を設置する等の意見相違として露呈し始めていたが、決定的には突然の滋賀への帰郷として発現される。天文台運用予算等の約定の問題とも言われるが、教団信徒代表者との激論に発展し、その場に居合わせた関係者によってその時の模様は証言されている。翌日の早朝、山本先生ご夫妻は、苦渋の思いを残して突然に帰還されたのだった。亡父・坂井義雄はその時は地方の関連組織に出張中で、後に先生の語られたところによると、「・・・坂井君、教団はいずれもう一度迎えにくるだろう」と胸中を披瀝されたという。大学時代のカルヴァー望遠鏡の納入に際してのご自身のお立場についても「・・・ボクは世間知らずだった」とその心境を父に語られたというが、似たような展開は再現されたというのは、言い過ぎであろうか。なお敢えて言及すれば、先生は亡父に教団との関係構築に対して、「・・・坂井君、ボクは天文学者にならなかつたら、神官になりたかったのだよ・・・」とも語られたという。ここでキリスト教徒としてのお立場を云々言っても無意味であろう。人は歳とともに思考も変化もすれば、発展もしていくものである。ましてや、社会現象は言うに及ばず、宗教にも芸術にも先生は造詣も深かったという。

この半年の後、先生はご他界されていかれた。余命があと五年延びていれば、相当に様相は異なったものとなったであろう。没年 1959 年 1 月、享年 70 歳、告別式はキリスト教様式であったという。

4 山本博士顕彰の活動と現状



平成 23 年 6 月、京都大学・益川記念館に仮保存された山本資料遺品類

2011 年(平成 23 年)、山本一清博士のご自宅に先生ご逝去後ほぼ半世紀に亘り保存され続けた、極めて貴重なる天文学遺品類の全品寄付事業が開始された。これらは山本家ご遺族さまのご英断によるものであり、またご子息であった山本進氏の亡きご父君遺愛品の顕彰保存という意思にも合致したものである。まず京大図書館に寄贈の旨を申し入れられ、学内の協議の結果、宇宙物理学教室と花山天文台の共同事業と方向付けがなされた。これらは京都新聞に数度に亘り掲載され、世情の噂に上り、それらの帰趨が注目を受けることともなった。

これに伴い、年来の支援を頂き続けてきた教室の富田良雄氏より、それらの説明を受けることとなった。というのは、カルヴァー46 センチ望遠鏡は、その後アナナイ教中央天文台から撤退移設となり、亡父・坂井義雄の斡旋により、岐阜市の私立経営「富田学園」に売却され、その後約 30 年に亘り使用を続けられたが、老朽その他の理由により学園側も保持しきれず、最終的に亡父との等価交換にて譲り受けたという次第になっていたものである。実際は亡父も老齢の道を辿り、それらはほとんど活用もされず保管のままであったのであるが、亡父の逝去とも相まって、山本水系の一員を占めた亡父遺品類の記憶と共に、花山天文台に寄付移管を敢行するという事に繋がっていく事を意味していた。

平成 23 年 6 月 21 日、住まいのある長野の保管場所より、一日がかりでの花山天文台移管作業が始まった。せいぜい 2 トン車一台で済ませられる程度の物品を移管した。もちろんカルヴァー 46cm 望遠鏡は、その大半を占めたが、手馴れた兄弟二人の積み込み作業と、現地の花山天文台スタッフのご協力の下、シーロスタット塔建物地下の小部屋に無事収納された。本来私も坂井遺族の手元において、天文活動に資すべき能力があればまたそのようにも思考し得たのであるが、今生に天文跡継ぎは無く、社会と学窓の研究保管資材の一部にさせていただけたのは、肩の荷を降ろすと共に安堵の境地に到達できた次第である。誠に幸いなる事として、富田氏、柴田花山天文台長に深甚の感謝を申し上げたい。因みに、カルヴァー望遠鏡本体以外の古式接眼鏡と案内小型望遠鏡、また渡辺敏夫先生所有であったという天文書籍類、また亡父所有の昭和初期の貴重な天文記事を含む科学雑誌と古い天界誌、また江上式星座投影機(島津製作所の平面投影プラネタリウム)、その他には、極く初期に作られた小型シュミットカメラ等を加えての移管とした。亡父の展開した岐阜県飛騨時代の「斐太彦天文処」(ひだひこ・てんもんしょ)の玄関を飾った山本先生名著の「星座の親しみ」冒頭部分自筆パネル、施設名を揮毫した看板など、多少悪乗り気味の様相もあるが、それらも保管いただいた。亡父にとってはこれ以上の待遇は無かつただろうと・・・思いつつの感慨を深めたのは言うまでもない。今後、46 センチ望遠鏡は、花山天文台の一隅に収納格納庫を設けて、かねての雄姿の如くの動態保存を目指し、出来れば観望可能程度として、グドエーカー氏と山本先生の気分になってもらい月面の観察などに公開できれば、望外の幸となろう。

その後、日ならずして、本命の山本天文遺品類は、何と山本天文台から 4 トントラック 4 杯の 15 トンに及ぶ物量であり、大きいダンボール箱 600 箱程度として大学に運ばれたという。すべてが貴重で、散逸を免れるべき物品であった事は言うまでもない。京大の益川記念館の一室を確保し、現在有志によって整理かつ分類等が施されつつあるという。上記写真は注意深く再現された書斎の一部である。それらは「第二回アーカイブプロジェクト報告会収録」(山本天文台特集)を参照されたい。また、出来れば保存移転をと考えられた「天文台建物」は、その後にご遺族様の手により、完全に取り壊された。兵どもの夢のあと・・・は、数多の心ある人の胸に生き続けることであろう。

おもしろうて やがて哀しき 鵜舟哉 松尾芭蕉



カルヴァー46cm 鏡



カルヴァー赤道儀本体



花山天文台での機材運搬



作業後・花山天文台全景



江上式星座投影機



星座の親しみ・坂井義雄自筆

以上は、2011 年(平成 23 年) 6 月 21 日、花山天文台にて午後より作業を開始し、無事に収納された主な寄付移管品類である。亡父・坂井義雄の特に心を砕いて収集したものを中心としたが、実際は第三者移管と破棄した物品も多い。特に先生のご逝去後に、暮らしのためにも始めた望遠鏡製作営利事業の過程を示すものは、四国で天体望遠鏡博物館を志向するグループ(代表・村山氏)に譲渡した。いずれ公開展示も期待されよう。

以上が凡その山本一清博士とその愛機、また周辺事情の要点である。今はただ瞑目しつつ、亡父を含む前世代の方たちの天文行脚人生を畏敬するのみである。心よりご賢察を賜らんことを願うものである。

5 結語と展望

- ・ 博士の指導を受けた方たちによる記録等の充実の必要性、ただし、高齢化にて中々に困難な状況。各地には多くの証言写真類も眠ったままであり、それら発掘等も望まれる。
- ・ 現在、京都大学にて進められているアーカイブ活動への協力の必要性。少数の東亜天文学会員にて整理担当を実施。(関心のある方は、宇宙物理学教室・富田良雄氏に連絡を願わしい。)
- ・ 京大の山本アーカイブ報告誌については二部に亘っているが、「山本天文台特集」については現在残余が無く、本年秋以降に増刷の予定。必要な方は、同じく富田良雄氏に問い合わせ願いたい。
- ・ 今般の山本先生の生涯を俯瞰する事は、大学在籍中はもとより、山本天文台での在野学者としての期間、また三五教団との関係までも、「官」に対しての「民」の重要性として感じさせる。そうした意義付けが、先生の業績評価の礎となりうる。
- ・ 三五教団の沼津市・香貫山中央天文台は、後に「月光天文台」と改称され、現在は公益財団法人「国際文化交友会・月光天文台」と呼称される。山本博士の衣鉢を唯一継ぐべき立場であろう。また姉妹組織の公益財団法人「オイスカ」(OISCA)は、NGO 組織として、発展途上国支援を展開し、高い評価を得て躍進中である。過去の天文業績を含めて、一層の評価を要するであろう。

6 参考文献類

- ・ 山本一清「星座の親しみ」
- ・ 富田良雄 久保田淳 「中村要と反射望遠鏡」 ウィンカもがわ・2000
- ・ 京都大学・宇宙会報 第 17 号 2002 年 12 月
坂井義人 岐阜金華山天文台・坂井義雄の思い出
- ・ 京都大学・宇宙会報 第 22 号 2008 年 3 月
坂井義人 星の光はこれを仰ぎ見る人の心に真摯の情を養い・・・
- ・ 京都大学・宇宙会報 第 23 号 2009 年 6 月
坂井義人 火星観測者・大沢俊彦の見た山本一清像
- ・ 京都大学・宇宙会報 第 24 号 2010 年 11 月
坂井義人 北海道中央例緯度観測標記伝
- ・ 京都大学の天文学 100 年と発展の礎 2011 年 2 月 28 日
(天文台アーカイブプロジェクト報告会収録)
- ・ 第二回天文台アーカイブプロジェクト報告会収録 2011 年 7 月 28 日
(山本天文台特集)

星空の
開拓者
たち

① アマチュア天文学の父



①土蔵を改造した地上3階建ての山本天文台第二観測室。最上階のドームに望遠鏡が備えられていた。大津市桐生
 撮影・木原貞男

②第二観測室の屋根の内部。天窓が開き、観測時に回転する仕組みで、山本は「建築上のひとつの新例を開いた」と自負した（京都大提供）



山本は花山天文台を積極的に（一般に）開放した。一般公開日はパス延べ3000人、計5千人が詰めかけたことも、さらに参加者のなかから優れた人を見出し、京大在学の有無を問わず、研究の場を積極的に与えた。山本の考えは美り、学者中心の他国と違う日本独自の天文学スタイルを生み出す。今では北半球の新星発見は日本のアマチュア天文家が多勢を占めている世界でトップクラスの活躍だ。同天文台は「アマチュア天文学のふるさと」とされ「子」

しのよい文津桐生の自宅を改築し、42年に私設の天文台を開いた。当時、東洋の大ききである、英国カルパ1製46型の反射式望遠鏡を置いた増設は、つまり、土蔵の上に増設された第二観測室は地上に隣建て。地下室は地下に隣建て。地下に実験室も備えていた。本造の三角屋根は、手動で回転し、生駒山天文台と同様の太陽望遠鏡の装置も設けていた。敷地内には写真暗室や研究棟も設けられた。研究棟は縁側付の2階建

外の著名な天文学者の論文や図書などがまとまつてゐる。アマチュア天文学の黎明期を示す一級の資料がここにある」

◇ 京都大理学研究科付属天文台と京都大総合博物館が「アマチュア天文学の父」と呼ばれる山本が残した天文資料を調査保存するプロジェクトに乗り出した。世界で活躍する日本のアマチュア天文学の礎を築いた人々々の足跡を追つた。『敬称略』

（行司千紘）

Ⅱ 2回掲載します。



山本一清

第一次世界大戦後で暮らしが豊かだった当時、天文学ブームだった。花山天文台開設前の20年に山本が設立した国内最古の天文同好会「天文同好会」(現・東亜天文学会)は、設立3カ月後は会員総数が500人を突破。22年にはアインシュ

タインが来日したことも
拍車をかけ、相対性理論
の関連書や、山本の著書
『星座の親しみ』はベスト
セラーになった。星に
ロマンを感じた人は多く
、宮沢賢治が『銀河鉄
道の夜』の初稿を書いた
ものこのころとされる。

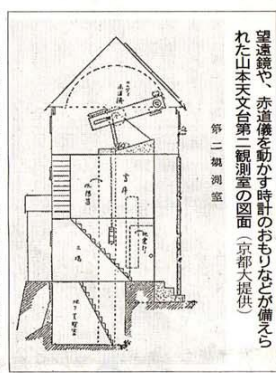
根拠地とすべく、見晴ら

大学退学後も山本は天
文学の一般普及に尽力し
た。アチュア天文家のた
らぬ人がいる。

東洋一の望遠鏡

文台から星を見たことを覚えていた。「友だちと一緒に望遠鏡をのぞくと、星がとてもきれいに見えました」

「聖地」として国内外の人が訪れた山本天文台は、老朽化のため約10年前から休館している。昨



て、屋上にシロル
ン式日照計やロビンソン
式風力計が取り付けられ
た。2階には天文研究を
目指す若者が全国から住
み込みで観測研究に従事
し、火星観測の第一人者
佐伯恒夫、海老沢嗣郎ら
が巣立った。

山本の孫・章（63）は
幼い時に山本と一緒に天

京都新聞 2011 年 2 月 9 日

アマ天文家の父 「聖地」に光を



私設天文台や資料調査保存プロジェクト着手

「アマチュア天文家の父」と言われた花山天文台（京都市山科区）の初代台長、山本一清（1889～1959年）の顔写真が残した天文資料を調査保存するプロジェクトに、同天文台を運営する京都大理学研究所付属天文台と、京都大総合博物館が着手した。天文ファンの「聖地」とされる山本の私設天文台にある天体写真乾板や学術書など5千点以上を調査する。関係者は「日本の天文学の黎明期を示す貴重な資料」と話す。



土蔵を改築し、観測室（建物の右側）や研究室を備えた私設天文台「山本天文台」（大津市桐生）

撮影・木原貞男

山本は京都帝大助教「天文同好会」（現・天文同好会）を創刊。29年に完成した花山天文台では市民向けの観望会や天文台の一般公開を積極的に開き、天体観測の普及に努めた。

退官後の42年、大津市桐生の自宅を改築して開いた山本天文台には、土蔵の上に回転屋根式の3階建て観測室を設け、当時国内最大の英国カルバー製46センチの反射赤道儀を装備。天文台を「アマチュア天文家の根拠地」と位置づけ、全国の若者が住み込みで観測を行い、火星観測の第一人者、佐伯恒夫氏、海老沢嗣郎氏らを輩出。東亜天文学会の事務局も置かれた。

京大博物館など

5千点以上「貴重」



山本が所蔵していた中国・南宋時代の星座石碑拓本。「28宿星座」と呼ばれる中国星座などを示す

死後も運営されていたが、建物の老朽化により、約10年前に休館。親族から「資料を寄贈したい」との依頼を受けた京都大理学研究所付属天文台が昨秋、京都大総合博物館と山本天文台を訪問したところ、天体写真乾板、天文台で関連企画「星空の文学の図書、星座図が施された中国・南宋時代（行司千絵）（9、10日付朝刊文化面で関連企画「星空の文学の図書、星座図が施された中国・南宋時代（行司千絵）」を連載します）

代の石碑拓本などが確認された。3月までに収蔵先を決め、資料の整理や調査を始める。大野照文・同博物館館長は「写真乾板は当時の星空を捉えており、超新星爆発などを調べる手がかりになる」と評価。柴田一成・同天文台長は「建物自体も他に例がなく貴重。遺族と話し合ったうえで、保存へ活路が見いだされれば」と話している。